連載

フィールド・アイ

Field Eye

ウランバートルから――①

東京大学准教授　澤田　康幸

Yasuyuki Sawada

▨オプの三物語とフィールドワーク

私は，開発経済学と呼ばれる分野を専門にしています。一言で言えば，発展途上国の経済を研究する分野ということになりますが，その内容は一国の経済成長や開発援助・国際的な資金移動を議論するマクロ的な分析から，ある村落に居住する特定の世帯の生活を記述するような極めてミクロ的な議論まで多種多様です。経済学の立場から言えば，マクロ・ミクロ経済学を基本として国際経済学・労働経済学・公共経済学・ゲーム理論・農業経済学等すべての分野の理論的成果を踏まえているといっても過言ではありません。さらには，今回のテーマでもありますが，理論的な帰結を検証するためのフィールドワークとその収集データを用いた統計分析が集約的に行われてきた分野でもあり，最低限の計量経済学の知識は不可欠です。最近では，フィールド実験と呼ばれる，実験経済学・ゲーム理論・フィールド調査が複合された分野が開発経済学の先端的な研究となっていて，トップジャーナルに次々と優れた研究成果が発表されています。実は，小生も今まさにフィールド実験をやっている最中でして，就寝前にモンゴル・ウランバートルでこの原稿を書いているところです。

話は元に戻りますが，経済学のさまざまな分野が複合した分野ゆえ，開発経済学を学習するためには経済学のすべてをある程度理解する必要があるということになります。更には，社会を多角的に捉えるための政治学・法学・社会学・人類学あるいは公衆衛生学や他の理科系分野の知識も必要です。実体を捉えがたい，しかし大変な困難のつきまとうこの分野を私は20年ほど前に志し，パキスタン農村をフィールドにし，また国際機関などでも働く機会を得ました。その後，東アジア・東南アジア・南アジア・中南米・最近は日本の地震被災地やアフリカでもフィールドワークをやってきました。しかし，開発問題とは一体何なのか良く分からないという思いが常に頭の片隅にあります。折に触れて思い出すのが，アメリカのある古い映画館でベンガルの映画監督サタジット・レイ（Satyajit Ray）の「オプの三物語」に出会ったときのことです。今回は，サタジット・レイの映画の話をしましょう。

一般に，インド映画というと「ムトウ踊るマハラジャ」のような愉快な娯楽映画を想像しますが，レイ作品の時間の流れは小津映画のように一見ゆったりとしています。とはいうものの，その根底には人生や家族，宗教や社会の因習・政治についての極めて強力なメッセージが込められており，そのことに私は強い衝撃を受けました。この三物語は全部で6時間もの超大作なのですが，映画館で見終えた瞬間に「立ちあがれない……」と感じた映画は後にも先にもこれだけです。

そもそも，人生には良いことも悪いことも付きものでしょう。「オプの三物語」に描かれた，ベンガルの村に生まれたオプの場合には特にそうでした。彼の人生は，平凡ですが希望と深い悲しみと絶望とに満ち溢れたものでした。

バラモンだったのですが，父の人の良さも災いし貧しい家に生まれ落ちたオプには，天真爛漫な姉ドゥルガがいました。美しい野原を駆け回る二人。しかし，あれほど元気だった姉は一夜であまりにもあっけなくこの世を去ることになります。失意の一家はバラナシに居を移しますが，ここで父が突然帰らぬ人になってしまいます。

母と二人きりになってしまったオプは，村の小学校で学ぶことに深い幸せを感じるようになります。新しい世界を学ぶことの喜び。そして彼の向学心は次第に見出され，満たされてゆくことになります。母との幸福な生活。希望が叶い，奨学金を得た彼は，唯一の身内であった母を村に残しカルカッタの大学で学ぶことになりました。

息子の帰省を待ち望む母。そして，きらびやかな大都市に心を奪われ，一人暮らしをしていたオプは突然の悲報を受け取ります。しかし，天涯孤独の身となってしまった「オプの物語」はこれでは終わらないのです。彼の希望と死と絶望とはさらに繰り返されることになるのでした。

テレビや新聞・雑誌などのマスメディアに登場する「飢餓」と「貧困」。一体それは「見世物」なのでしょうか。いや，現実の生活そのもののはずなのです。以来，10以上のレイ映画を見ましたが，その中でも三物語と同様に印象深かったのが1943年のベンガル飢饉を題材とした，1973年作の「遠き雷鳴」でした。若く清廉な夫婦の生活を中心に物語が進みます。一見穏やかに見える日々も米価格の連続的な値上がりや暴動騒ぎをきっかけに大きく変化してゆきます。

サタジット・レイと同じくノーベル賞作家・詩聖ラビンドラナート・タゴールゆかりのシャンティニケタンで学んだアマルティア・センは，地域全体で一人当たり食糧生産が改善していたにもかかわらず300万人以上もの人々が亡くなったベンガル飢饉の原因をさぐり，その貢献もあって1998年にノーベル経済学賞を受賞することになりました。「飢饉」「貧困」と呼ぶと何か我々日本人とはかけ離れたもののように感じるかもしれません。しかし，「貧困は別世界で起こるのではない，国や文化の違いを超えて我々の生活とは連続したものなのだ」という現実感をサタジット・レイの映画は教えてくれます。アマルティア・センは，「文化や社会の特殊性を超えて，我々の生活と同じように個人レベルに還元される現実の多様性を鮮やかに示している」とレイ映画を解題しています。

他人の人生と交わるというには程遠いかもしれませんが，フィールドワークでは実にいろんな経験をします。固辞してもラッシーやチャイ・コーラがでてきたり，「お前の英語はひどすぎる。俺はすばらしい英語を話すだろ？秘密を知りたいかい？」とBBCラジオを毎日聞くように説教されたり，昼間なのに「まあまずは飲め」と来たり，水タバコを呑まされたり，挙句の果てには，「うちの坊主を日本に連れて行ってやってくれ」と懇願されたこともあります。ここ，ウランバートルでも「よくぞ私の話をきいてくれた」といわんばかりに握手を求められたりしているのですが…。特に私のような経済学者が行っているタイプの調査では，非常にかっちりと設計された質問票（これを構造化された質問票といいますが）を使います。こうした調査はしばしば一方的にこちらが必要な情報を聞いていくという形式になり（すごく脱線したりはしょっちゅうですが），無味乾燥になりがちで，批判の対象になったりもします。そうした調査においても，フィールド調査で受け取る答えの一つひとつに，サタジット・レイが描いたような現実の生活があるということは忘れないようにしようと心がけています。

サタジット・レイは，インド歴史上もっとも優れた映画監督とされています。1921年にベンガル地方のコルカタで裕福な家に生まれました。タゴールの元で2年間絵画を勉強し，画家を目指していたそうです。大学卒業後は，イギリスの広告会社でアートディレクターとして勤務する一方，次第に映画製作に興味を持つようになりました。彼が初めて製作し，1955年に世に出た映画，「大地のうた（Pather Panchari）」はきわめて高い評価を得，それに続く「大河のうた（Aparajito）」「大樹のうた（Apur Sansar）」とともに，今回紹介した三物語（Apu Trilogy）として知られているのです。三物語の音楽はシタールの巨匠ラビ・シャンカーであり，すばらしい音楽も楽しめます。「大地のうた」で1956年のカンヌ映画祭においてベスト・ヒューマン・ドキュメント賞を受賞したのを皮切りに，数々の賞を受賞し，インド映画を世界に知らしめた第一人者とされています。1991年にアカデミー賞名誉賞を受賞されましたが，翌年亡くなってしまいました。社会の多様性を瞬時に描き出してくれるレイ映画のいくつかは，残念ながら現在行方不明との事です。何とか見つかってほしいものだと思います。

さて，次回はサタジット・レイのTeen Kanya（Three Daughters）と題する三つの短編集の一つであるThe Postmasterからはじめましょう。Teen Kanya（Three Daughters）といいつつこの短編集は，現在は二つしか残っていないそうです。そして，このThe Postmasterですが，ラビンドラナート・タゴール原作の名作です。ベンガルの片田舎に住む孤児の女の子Rathanと町から予期せず派遣された郵便局長Nandalalとの触れ合いが美しいのですが，この物語を出発点として，児童労働のフィールド調査についてお話できればと思います。

参考文献

サタジット・レイ，（翻訳）森本素世子（1993）「わが映画インドに始まる」第三文明社.

Sen, A. K.（1996）“Our Culture, Their Culture：Satyajit Ray and the Art of Universalism,” *New Republic*, April 1.

さわだ・やすゆき　東京大学大学院経済学研究科准教授。最近の主な著作に『市場と経済発展――途上国における貧困削減に向けて』（共編，東洋経済新報社，2006年）。開発経済学・応用ミクロ計量経済学専攻。